

ケロロ軍曹が遠い星からやってきて日向家の地下に基地を持ったのは今から何年前のことになるだろう。彼はガマ星靈第58番惑星宇宙侵攻軍特殊先行工作部隊(通称ケロロ小隊)を率いる宇宙人だ。ペコポン人の家族である日向家に居候している身である彼は、食器洗いや掃除洗濯などの家事をしてお小遣いを貰い、その金で自分の趣味である「ガンプラ(＝機動戦士ガンダムのプラモデル)」を購入して製作したりする毎日を送っている(理想的な生活だ、うらやましい)。ちなみに「ペコポン」とは、ケロン星における地球(太陽系第三惑星)の呼び名だ。

これはテレビ東京で放映中のアニメ「ケロロ軍曹」の話である。このアニメは一部で絶大な人気を誇っている。私のゼミの学生の中には「ケロロがないと生きていけない」などと言いつける者さえ出る始末だ(どんなゼミだ)。調べたわけではないので単なる憶測の類だが、子供のみならず、二十代後半から三十代前半の世代にも多く受容されているらしい(どんな国だ)。

ケロロ軍曹は、本来の職務である「地球侵略」を、まったく言っていないほどする気がなく、ほぼ毎日を雑事にかまけて過ごす。しかし、彼が地球侵略を遂行できる可能性がゼロかというところ、そんなことはなく、圧倒的な科学力を背景とした火力・兵力は、すぐにでも地球を征服することができるほどのものとして表現されている。さらには、彼のことを「おじさま」と呼び思慕敬愛する「モアちゃん(フルネームはアンゴルモア)。姿はコギャル」という宇宙人の持つ火力は圧倒的であり、その百分の一程度の力を発揮するだけで、地球を割ってしまうことが可能とされている……っというか、荒唐無稽？

「意志を持つていること」と「意志するものが現実となること」は当然別であり、私たちが意志することの多くは現実化しない場合が多い。私は当面大学を辞められそうにないし、ジャズドラマーとしてデビューできそうにもないし、ノーベル賞もとれないし、不倫もできない。しかしそれでもこの「意志」というものは、人を人たらしめている基本的な要素とされることが多く、「意志のない人間」というものの存在を想像することは難しい……っというか、則天去私？

そしてまた、意志と自由は不可分なものとされ、「自由であること」が意志の基礎要件とされた

けんぞう

(一) 夏目漱石『道草』冒頭による。「健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。これは、こつという評論系の文を書き公表することが、私にとつて道草のようなものになるという意味においてではなく、『文藝界』という由緒ある雑誌に敬意を表すべきと考えたことによるオマージュ。

(二) ノストラダムスの予言に登場する「恐怖の大王 アルゴルモア」に由来すると思われる。作中では「モアちゃん」と呼ばれている。

(三) セリフの最後にこのように「四文字熟語を付ける」のは、アンゴルモアの口癖。発音としては、疑問形であるかのように語尾を上げる。

(四) 自然の摂理にしたがい、私心を捨て去ること。最晩年の夏目漱石の心情であると言われる。

りもするま。しかし「意志を持たない」という自由は存在しないのかという問題が存在する。何かをしないことが意志の発露であるならば、「意志を持つこと」をしないというのも、同様に意志であるはずだ。うらむ、これは難しい問題だぞ。

スピノザは、石は石であろうとしつづけ、花は花であろうとしつづけるといい、それをコナートウス(自己保存力)と呼んだま。もちろん、人は人であろうとしつづけるし、私は私でありつづけようとする。だから私は「現在の状態」を維持するために、勉強したり、筋トレをしたりするというわけだ。しかし、「くであろうとしつづける」とは意志であるのだろうか。そして、もしもコナートウスが意志なのであれば、「私でないこと」も許容されているはずだ。うらむ、これも難しい問題だ。私は「私でないこと」が可能なのだろうか。

人が「何者かでない」というものであるとするならば、そこに自由は存在しない。ここでも、自由であることと意志を持つことが相反するというわけだ。もしも人が究極の自由を求めるならば、「何者でもなく」また「何もしない」という選択肢も確保されていなければならない。しかし、「何者かである (to be)」と「何者かでない (not to be)」⁽⁵⁾、もしくは「存在する」と「存在しない」の狭間で悩むデンマークの青年⁽⁶⁾は、自由なのだろうか。

アガンベン⁽⁷⁾は、「バートルビー 偶然性について」(『アウシュビッツの残りのもの』⁽⁸⁾)という評論において、メルビル⁽⁹⁾の小説「バートルビー」を引きつつ、人間の「意志」と「必然性」

⁽⁵⁾ 悪を選べる可能性があることによつて、自由意志は機能する。この説明は、なぜ万能であるはずの神がこの世界に「悪」を作ったかの説明としても使われる。もしも悪が存在しないのであれば、人は善にしかないわけであるから、そこに自由は存在しない。したがって、ここでは意志が意味を持たなくなる。つまり意志とは常に自由意志のこと。

⁽⁶⁾ 哲学や現代思想(同じことだが)では、難問のことをアポリア (Aporia, ギリシア語 *dropia*) と表現する場合がある。これがアポリアなのは「意志を持たない」ということが意志であれば、矛盾となることによる。「私は絶対に意志など持たない」という硬い意志を持っている」という表現が不可能であることを考えればわかる。これはまた、自己言及の問題としても知られている。

⁽⁷⁾ スピノザ『エチカ』第二部定理六。conatus はその単語単体では「努力」という意味。正確には conatus in suo esse perseverandi” (自分の存在に固執する努力)。

⁽⁸⁾ 前述の議論のよつに、意志は常に自由意志であるのだから、選択の自由が担保されていなければそこに自由は発生しない。つまり、「私が私であらうとする」と「自由意志による選択であるならば」「私が私であらうとしない」と「許容されていないとはならない」ということ。

⁽⁹⁾ シェイクスピア『ハムレット』第三幕第一場。"to be, or not to be." 「生きるべきか死ぬべきか」という訳が有名であるが、様々に訳されてきたことばも知られる。「ある あらぬ」「世にある 世にあらぬ」など。

(10) ハムレットはデンマーク王子。

(11) ジョルジョ・アガンベン (Agamben, Giorgio)。哲学者。ヴェネチア建築大学教授。

(12) Quel che resta di Auschwitz: L'archivio e il testimone (Homo sacer III), Torino, Bollati Boringhieri, 1998.(上村祐男・広石正和訳『アウシュビッツの残りのもの——アルシーヴと証人』月曜社、1001)

(13) ハーマン・メルビル (Melville, Herman)。アメリカの作家。『白鯨』が有名。

について論をめぐらせる。何かを依頼すると、「しないほうがいいのですが…… (I would prefer not to)」と言って断るバートルビーは、「する」と「する」もしくは「ある」と「あらぬ」の狭間に浮遊する^(四)。アガンベンは、「意志を持たないという自由」が確保されるということについて考える。

アガンベンがそこで持ち出すアリストテレスの「潜勢力」という概念は一見わかりづらい。「ここでは「所有」という概念に置き換えて考える。たとえば、金銭を所有しているということは、それを「使う」とも「使わない」とも「できる」という状態である。また、どれほどくだらないことにも使えるとき、さらには、それをドブに捨てることさえできるとき、「所有」していると言える。所有は、自由になるための近道であり、むしろ所有することが自由であることと同義である。金銭を（上記の意味で）所有しているとき、私たちは金銭という束縛から解放され自由になる。逆に言えば、金銭を所有していないとき、私たちは金銭に束縛され、そこにおいて自由は失われる。技術から自由になるためには技術を所有しなければならず、また、社会から自由になるためには社会を所有しなければならない。私たちが社会に束縛されるのは、結局のところ社会を捨てることができないからだ。この「所有」を「潜勢力」と呼ぶのは、それが実際に捨てられたり浪費されたりすることが問題ではなく、「捨てる可能性」「浪費する可能性」の存在に中心が置かれるからである。意志を「使わない」可能性があるとき、人は、意志を所有することができ、意志の束縛から逃れることができる。アガンベンは、バートルビーがその実験場であると指摘する^(五)。しかし、「意志の束縛」とは、いったい何のことだ。そうまでして「魂の自由」を確保しなくてはならないのはどうしてだ。

私たちの社会は、過度の忠誠心（もしくは参加^(六)アンガージュマン^(七)）を個人に要求するシステムを作り上げてきた。アンガージュマンとは、ずいぶん格好のいい言葉だが、その実「がんばれ」ということではないと感じる。がんばれる人はいよいよね気楽で。がんばれないんですよ僕らは。この世界でがんばる意味を見出せない。だってここは「ペコポン」という名前のちっぽけでへっぽこな星でしかないし、がんばった結果として、いい思いをしている人をあまり知らないから（異論アリ？ じゃあ、自分より「偉い」「凄い」「何者かである」人間を十秒以内に二名列挙せよ……ほらねっ）。

(四) 「I would prefer not to be」であれば、「何者でもないほうがいいのですが」もしくは「いないほうがいいのですが」という意味になるが、(三)では動詞 (be 動詞も含む) が省略されていることに注意。邦訳では「ここで書いたように「しないほうがいいのですが……」となっているが、それは「I would prefer not to do」に対応する。

(五) もしも「意志」が束縛であるならば、そこには根本的な矛盾が存在する。なぜなら、「意志」は常に自由意志であるはずなのだが、その自由意志そのものが束縛を形成していることになるからだ。

(六) engagement, サルトルの用語。英語では engagement (関与) よりも commitment と訳れることが多い。

近代的自我^(二七)は、その基礎に意志の自由を置いている。「自由」なのだからがんばれ、というわけだ。また、自由なのだからがんばらなくてもいいけど、がんばった人にしか恩恵はないよ、というわけだ。恩恵があつた頃はいいけれど、それが無くなったらこの構図は崩壊する。そして自由ばかりが称揚され、「がんばらない」「何者にもならない」「何もしない」というほうを選択した人間が落ちこぼれていくという仕組みばかりが残つた。ああ、これはあれだな。「あなたの考えを自由に述べなさい」と言つておいて、その「自由な回答」を採点するというヤツだ（私もよくやるぞ……騙されるな！）。

ドウルーズ^(二八)は、「バートルビー、または決まり文句」(『批評と臨床』第十章)において、バートルビーが本来の職務である「筆写」さえもしなくなっていくことに着目し、論を進める。「魂の自由」なるものを維持するためには、二つの方法がある。一つは前述のように「所有すること」であるが、もう一つは、「望まないこと」である。金銭の束縛から逃れるためには、そもそも金銭によつて得られるであろう利得を望まなければよい。言うのは簡単だが、これがなかなかどうして本当にマジ超スゲー難しい^(二九)。しかし私は、「金メダル」には束縛されていない。それをまったく望んでいないからだ。タダでくれると言われてもいらぬ……ゴミになるだけだし面倒だ。ごめんねそれを目指してる皆さん。だけど皆さんも「学会の論文賞」なんか欲しくないでしょ？（あ、私も全然欲しくないな……自爆）。だからもしもそれを「くれる」といわれたら、きつとこのように言うだろう——もらわないほうがいいのですが——。

「しないほうがいいのですが……」という表現においては、「何をしないほうがいいのか」が明示されていない。ドウルーズはそれを、「拒絶」でも「負の意志」「虚無の意志」でもなく「意志の虚無」なのだと指摘する。『もらわない』ほうがいい」と表現した瞬間に、「意志の虚無」は、「虚無の意志」に変化する。バートルビーもこの罠に落ちた。この方法のみによつて自由を求め始めると、無限に後退してしまふ。なぜなら、自分を束縛しているものをどんどん脱いでいくことによつてしか自由を達成できないことになるからだ。「金メダル」を「もらわないほうがいい」と感じる私は、それを言葉にすることによつて一歩後退し、そこにあるマジノライン^(三〇)の中に「自分を束縛しているもの」を見ることになる。そして「金銭」が私を束縛していることを知れば、

(二七) それまで、祖先や祖父や父と同じ時期に種をまき、同じ時期に収穫し、同じものを食べ、同じ暮らしをしてきた人間たちが、主として生産形態の多様化と貨幣経済の普及によつて、祖先とは異なる生活・行為をするようになった。それに起因して、個別の意志決定が必要とされるようになる。近代的自我の発生とは、そのような生活形態の変化によつて、意志決定が重要な役割を担うようになったことを意味する。

(二八) ジル・ドウルーズ (Deleuze/Gilles)。哲学者。『差異と反復』『アンチ・オイディプス』などが有名。『批評と臨床』は、最晩年の論文集。

(二九) 急におかしくなったのではない。少し飽きたので、ケロロ軍曹の言いそうな表現を使つてみただけ。

(三〇) 第一次世界大戦中、敵兵を一兵たりとも国内に入れないという多大な決意のもと、フランスが巨費を投じて構築した防衛線。転じて、「これ以上は一步も後退できない最終防衛線」という意味で使われる。難攻不落と言われたものの、ナチス・ドイツはここを迂回してあつてなくフランスに侵攻。

それも脱がなくてはならない。どこかで線を引き、後退をとめなければならぬが、それは同時に「自分が意志するもの」「望むもの」を明らかにする営みでもある。もちろん、意志や願望が明らかになれば、当然、それによって束縛される。「望まないこと」によって、逆に「望んでいるもの」が明らかにするのは、奇妙な引き算である。おそらくその引き算の終着点は、「生きる」ということに関してのものとなる——「生きていないほうがいいのですが」。

地球侵略なんか「しないほうがいい」^(三)と考えるケロロ軍曹は、ときに侵略作戦を実行に移すこともある。まさに日和見であり、首尾一貫していない。彼はそうやって「可能態」である自己を維持し、「潜勢力」を保持し続ける。ときに望み、ときに望まない。首尾一貫しないこと、粗忽者であること、非論理的であることによってしか、これを解決する方法はない。多くの人間は、非論理的であり粗忽者であることによって、この「無限後退の罟」から幸いにも逃れることができていく。真に論理的であれば、誰もがバートルビーになる——もしくは、新たな所有を求めて欲望を肥大化させていく。しかし非論理的であるなら、生きる意味を見出せない。じゃあどうすればいいのさ。

「君は、やればできる子なんだ」と言われ続けてきた子供のなれの果ての青年は、何もやらなくなる。なぜなら「やればできる」という状態が「可能態」であり、可能態であることが宣言された時点で、もうそれ以上の段階に進む必要はないからだ。「やればできる」は潜勢力であり、また「やってもできない」と表裏一体である。この潜勢力を保有するために努力しなければならぬのに、保有してもいないうちに宣言されてしまおうというわけだ。だったら「やらない」よね。だって「やってみて、できなかった」ら、潜勢力を持っていなかったことがバレるから。同様に「何にでもなれる」と言われたら、何者にもならなくなる。「本当はいい子」といわれたら、悪い子になる。「君は、無限の可能性を持っている」と宣言されたら、もうそれで十分だ。しかしそれらは全部嘘だ。やってもいないのに「できるかできないか」は誰にも判断できないし、「本当はいい子」という表現の真意は理解できない^(三)。「何にでもなれる」は端的に嘘だ。潜勢力も可能態も自由も、「獲得する」ものであって、「与えられる」ものではない。それらは「所有されていない・偽物の」潜勢力であり可能態であり自由であって、そんなものばかりが蔓延している。そしてそれを与えることが教育であるという勘違いが蔓延している。「何も獲得したことのない教員」に習うから、そんなことになる——「教える側であろう」としつづけていますか？(F)教員の皆さん)。

ケロロ小隊の隊員たちが家の外に出るときは、ペコボン人に変装するための装置である「ペコ

(三) ネット上でカリスマ的ともいえる人気を誇るバンド「相対性理論」の曲「バーモント・キッス」の冒頭の歌詞は「わたしもやめた 世界征服やめた」。ちなみに私がこのバンドの存在を知ったのは、アイシッシュタインの「一般相対性理論の式を確認しよう」としてネット検索したとき。大量に検索にひっかかってくるので、何かと思ってアクセスしたら、これだった。今はMP3プレイヤーに入れて、通勤時に聞いている。

(三) 「本当は△△という表現は、『現実には△ではない』と言っている。つまりその真意は、『△になれ』という命令でしかないのだが、その当人以外に発せられるとき、意味が不明となる。『彼は本当は賢いんだ』『彼女は本当はいい人なんだ』とは、誰に対して、何を目的として表現されるのか、私にはよくわからない。

ボン人スーツ」を着用したり、「アンチバリア」という名称の装置を使って不可視状態になって出かける。「アンチバリア」とは、なんと美しい言葉であろう。自らは不可視状態(透明)になるが、周囲を見ることができなのが「アンチバリア」だ。

「自由であること」が最高善であるとは決して考えられない。束縛状態のままでも何ら問題は無い。そして束縛は、別名「絆」とも呼ばれる。人は、自分が率先して埋没した束縛を「絆」という美しい言葉で呼ぶというわけだ。束縛が絆と呼ばれるのは、それが利益や恩恵をもたらすからだ。もしくは、ある束縛から解放されるために、別の束縛の中に身を委ねるしかないからだ。社会や職場や友人や家庭が利得をもたらさなくなっていくとき、人はどんどん狭い範囲内に退行していく。「家族の絆」ではなく「家族の束縛」となり、「社会の絆」ではなく「社会の束縛」となったとき、人は殻に閉じこもる。

私は出かけるとき、周囲に蔓延する愚かな音声文字列による精神汚染を防ぐために、携帯型MP3プレイヤーで耳を塞ぎ、書籍で目を塞ぐ。「逆アンチバリア」だ。絆など、とんでもない。ケロロ軍曹の爪の垢でも煎じて飲むほかはないが、カエル型宇宙人なので彼に爪はない(と思う)。モロボシダン(三)やハヤタ隊員(四)や本郷猛(五)や一文字隼人(六)は、自分の職務に悩むことも戦いを拒否することもなかった。しかし、機動戦士ガンダムのアムロは戦場から逃げ、新世紀エヴァンゲリオン(七)のシンジは戦闘を拒否し、ナウシカは「もう殺さない」と言う。アムロは帰る場所(つまり「絆」の存在する場所)を見つけ、ナウシカは大地との絆を取り戻したが、シンジは絆を見つけないで死んでしまった。ケロロ軍曹は、まだ続いている。

ま、現代の日本では、こういうアニメばかり流行る(七)。

末筆ではあるが、この連載のタイトル(八)「象をぶつ」は、周知のとおりオーウェル(九)の評論集「象を撃つ」(“Shooting An Elephant”)のもじりである。私は鉄砲を持っていないし、撃てないし、撃ったら死んじゃうし、死んじゃったら怖いし、だからせいぜい「ぶつ」という程度かな……って感じの説明で、どうすか(一〇)。

(初出『文藝春秋』二〇〇七年四月号、二九六―二九九頁、文藝春秋)

- (一) ウルトラセブン。
- (二) ウルトラマン。
- (三) 仮面ライダー1号。
- (四) 仮面ライダー2号。

(五) 夏目漱石『虞美人草』末尾による。「(六)では喜劇ばかり流行る。」

(六) 当初このタイトルを想定していたが、『象を撃つ』は、それほど有名ではないということと、「メディアフィロソフィー」に変更した。

(七) ジョージ・オーウェル (Orwell George)。「1984」が有名。言わずもがなだが、村上春樹『1Q84』は、(八)『1984』に由来。

(九) テレビ版『ケロロ軍曹』の「次回予告」を参照のこと。